

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 「公共」は、人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせ、現実社会の諸課題の解決に向け、選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理を活用して、多面的・多角的に考察したり、構想したりする過程を重視する。

基礎的・基本的な概念や理論、考え方等を活用し、文章や資料を的確に読み解きながら考察する力を求める。

問題の作成に当たっては、現実社会の諸課題について理解したり考察したりするために必要な概念や知識に関わる問題、多様な資料を用いて考察する問題などを含めて検討する。

- 「倫理」は、人間としての在り方生き方についての見方・考え方を働かせ、現代の倫理的諸課題を見だし、その解決に向け、多面的・多角的に考察したり、公正に判断し構想したりする過程を重視する。

「公共」での学習などを踏まえ、倫理に関する概念や理論についての理解を深め、それらを活用して、考察する力を求める。

問題の作成に当たっては、倫理的課題の解決に向け、先哲の思想に関する原典など多様な資料や他者との対話等を手掛かりにして、批判的に吟味して思索を深めたり、様々な立場から考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第1問と同じ。

第2問 『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第4問と同じ。

第3問 「他者と共通理解」に関する源流思想および近現代思想についての課題探究を通して、「他者と共通理解」に関連する知識の定着度、倫理的課題についての思考力を測ることを狙って作問した。あわせて、他者といかに関わるべきかについて考えさせ、資料読解と会話による議論を通じて思考力・判断力を深めてもらうことを目論んだ。

問1では、東西の思想家の他者への慈愛・慈悲をめぐる思想についての正確な知識を問うた。適切なものを二つ正確に選ぶことを求める問題であったことから、受験者の解答は分かれ、やや難となった。問2では、東西の思想家の普遍をめぐる思想についての正確な知識を問うた。問1と同様、受験者の解答は分かれ、やや難となった。ウィリアム・オッカムについての誤答選択肢が特に受験者を迷わせたようである。問3では、クーンの科学論について、正確な知識と、資料を正確に読み取る力、及び読み取った内容に知識を応用する思考力を問うた。識別力も高く、所期の成果を得られたと考える。問4では、西洋哲学における人間観に関する思想について、正確な知識と理解を問うた。受験者の解答は分かれたが、成績上位者を識別する問題となっている。問5では、古代ギリシアのポリスについて、アリストテレスの思想についての理解力と判断力を問うた。識別力が高い問題であった。問6では、動物を食べることを禁止する大乘仏典を読み、関連する知識を問うとともに、資料の内容を読み取る能力を問うた。資料はマイナーなものであり、知識も第4問でとりあげられることが多い聖徳太子に関するものであったが、おおむね識別力があつたと思われる。問7では、ウィトゲンシュタインの言語哲学についての正確な理解を問うた。正答率が低く、やや難問となったが、識別力が高く、誤答選択肢も複数のものに迷わされたようである。問8では、他者との関係についての西洋近現代の哲学者たちの考えについての正

しい知識を問うた。ホッブズとヘーゲルの誤った説明が、用語自体は正しく説明のみ誤っている形式であったせいか、正答率の低い難問となったが、成績上位者を識別する問題となっている。問9では、三つの場面の読解を通じ、他者を巡る多様な観点を具体的場面にあてはめる思考力・判断力を問うた。正答率は高かったものの、正答率が高くなりがちな会話文の読み取り問題であることを考えれば、一定の識別力は確保されたと言える。追・再試験の第3問全体の成績は本試験よりやや低かったが、全体としては適切な設問がそろっている。他者との関りや共通理解の可能性について問い、生き方について考えさせるという問題の趣旨は読み取りやすく、出題意図は十分に果たされたと評価できる。

第4問 冒頭会話文と設問で、日本思想史上の論争を紹介するとともに、古代から現代にいたるまで、繰り返し議論・対話の重要性について説かれてきたことを示した。具体的な論争の事例を通して思想のダイナミズムに触れるとともに、どうすれば対話を通じて思想を深めていくことができるか考えさせることを狙いとした。各思想家の具体的な思想内容に触れる授業資料・資料を充実させた分、冒頭会話文を簡略化し、文章量のバランスをとった。

問1は、聖徳太子の、議論の重要性を説く思想と、その背後にある凡夫観との連関の理解を問う設問であった。教科書に載っている憲法十七条の主要条文の相互の連関を読み取る応用力を測るものであったが、受験者にはやや易しかったようだ。問2は、最澄の法華一乗思想の特徴についての正確な知識を問うた。きちんと学習した受験者は正答にたどりつけていた。問3では、江戸時代の儒教と国学との間に生じた論争に即して、これらの思想の正確な知識と理解を確認したものである。6択ということもあり、解答はばらけていたものの、勉強をしていた受験者にとっては難しくなかった。問4は、討論の重要性を説く中江兆民の論説『平民のめさまし』を提示し、資料を読み解く思考力と明治の思想的状況・兆民の思想内容についての知識を問うた。読み解き自体で誤る受験者は少なかったが、読み解きと組み合わせることで、知識が正確に理解されているか否かを確認できた。問5では、会話文で現代の議論のあり方に関する問題を意識してもらいながら、三木清「批評と論戦」を読んでその正確な読解を求めると同時に、小林秀雄が考える批評に関する基礎的知識を問うた。読解部分については多くの受験者が正解にたどり着いていたが、小林に関する教科書知識で差がついたようである。結果を見ると、難易度は設問ごとに異なるが、全体として妥当なものとなり、十分な識別力を持たせることができた。知識・思考力両面で学力のある受験者には確実に得点できる大問であったと考える。

第5問 生命倫理分野で重要なテーマとなっている幹細胞・再生医療に関わる倫理を取り上げ、国際幹細胞学会（ISSCR）が出している五つの倫理原則（2021年版）を下敷きとして、次の視点を問う応用問題を目指した。その視点とは、（1）心理学関連の概念や実験データの読み取り、（2）患者・研究参加者の福祉の優位性、（3）様々な同意取得の手法とその議論、（4）先端的科学技術の成果をめぐる公平なアクセスについての4点である。また発展的な内容については、会話文をよく読むことにより、最近の議論の先取り学習的な要素を無理なく回答できるように工夫した。全体として最先端の科学技術をめぐる倫理的原則の議論が、その実、基本的な倫理の知識や議論に根差していることを考えてもらう設問を目指した。問1は、胎児であっても顔や顔に見えるものに対して注意が向きやすいという社会性の基本となる知見を検証するための実験結果の読み取りを課した。認知心理学は、心理学における重要な分野であるにもかかわらず、倫理の教科書の中での取り扱いはずしも大きくない。しかしながら、今後の倫理において重要なテーマであることは疑いようもない。成績下位層では、注意をそらす行動と注

意を向ける行動との対比に関しての理解ができていないことがうかがわれた。問2は、「人間の特質」をキーワードに、教科書に記載がある心理学に関わる理論や考え方、人物についての基本的な知識を問うた。正答率が低かったことから、正答選択肢に記載されているコールバーグは、全教科書に記載があるものの理論的知識の理解は不十分であることが推測される。問3は、ISSCRの倫理原則の一つである「患者・研究参加者の保護」を下敷きとして、患者や研究参加者の権利や自己決定についての基本的な知識を問う内容として設計した。難しく感じた受験者が多かったようであるが、特に⑥の選択肢を誤答した受験者が目立った。人を対象とした実験自体は禁止されていないという基礎的な事実の理解がなされていないこと、他者危害原則の理解の不足があったことがうかがえる。問4は、ISSCRの倫理原則の一つである「患者と研究対象者の尊重」と紐づけながら、インフォームド・コンセントなどの同意取得の問題を考える設問である。インフォームド・コンセントは、生命倫理・研究倫理をまたがる極めて重要なテーマである一方で、共通テストにおいては必ずしも多く出題されてきたわけではない。そこで、現在整理が進みつつある様々な研究参加者同意の在り方（インフォームド・アセントなど）を、会話文のヒントをもとに解答する先取り学習的な設問を目指した。きちんと文章を読んだ受験者にとっては容易な問題であったと考えられる。問5は、ISSCRの倫理原則の一つである「社会的・分配的正義」を下敷きとしている。幹細胞・再生医療をめぐる近年の倫理的議論においてもロールズに代表されるような古典的な正義論に関わる視点が重要な倫理的視点の基盤になっていることを、功利主義的立場と対比することで考えてもらう問題を目指したものである。解答傾向を見る限り、八択問題でもあったことから難易度は決して低いものではなかったと考えられるが、同時に識別力の高い問題として成立していたといえる。

第6問 環境問題への取り組みとして取り上げられる傾向のあるSDGsが、実は現代の他の諸課題と倫理に関わる包括的目標であり、それゆえに身近な生活の質に直接関わるものであることを考えさせることを狙いとした。このためリード文では、SDGsをめぐるやりとりを示し、各設問においては福祉、教育、ジェンダー平等そしてケアについての幅広い倫理的な知識と思考を問うている。受験者の倫理の学習成果を身近な問題へと結びつける趣旨は十分に実現できたと判断される。問1、問2は知識問題で、SDGsの理念や、センのケイパビリティ概念と福祉分野におけるその役割について正確に理解しているかを問うた。いずれも実質二択になったようだが、難易度は標準的であった。問1に関しては、環境問題が人類の課題であるとされた国連人間環境会議のスローガンを含む選択肢との間で迷った受験者がいた。また、問2ではロールズの思想内容を含む選択肢との間で迷った受験者がおり、ロールズ的な正義論批判がセンのケイパビリティ概念に含まれていることについての知識が十分ではないように思われた。問3は、教育分野におけるSDGsの目標を現実問題へと応用していく思考力と判断力を問う組み合わせ問題である。実際に問われているのは教科書に記載されている用語の知識なのだが、難易度は高かったようである。問4、問5は教科書の内容をさらに深める狙いもち、資料や説明を読み、日常的な場面にその知識を応用させることを意図している。資料を注意深く読み、選択肢を吟味すれば、比較的素直に正解が導き出せる。このため両問題ともに易しかったようだが、第6問全体からみれば、問3の難易度が高くなったため、結果的に全体の平均点を保つ機能を果たしたように思われる。

問1は、「誰一人取り残さない」、および「人類が直面している多くの課題の解決」というSDGsの理念を問う知識問題の設問。実質二択の問題とはなったが、純粋な知識問題としては狙い通りの設問となった。問2は、センのケイパビリティ概念とその福祉分野における役割につい

て正確に理解しているかを問う知識と読解の問題で、誤答の中ではロールズの思想内容の選択肢を選ぶ受験者が多かったようで、作問者の意図よりもケイパビリティ概念の基本的な背景が押さえられていない受験者が多かったのではないかと推察する。問3は教育分野のSDGsの目標に関して、教科書における正確な知識を問いながら、それを現実問題へと応用していく思考力と判断力を問う組合せ問題である。教科書から学んだ正確な知識を基にすれば、応用はさほど難しくないと予想していたのだが、正確な知識の選択という時点で躓きがあったように思われる。問4は、ジェンダー平等を、身近な大人たちの話題と結び付けて考え、個人の努力や工夫だけでは、ジェンダー平等には到達、また維持することが難しいという点について考えてもらうことも意図していた。難易度は低かったようだが、全体的な識別力は認められる。問5は、資料と説明を通して、ケアの倫理と正義の倫理を比較しながら理解すること、そしてその理解を前提とした上で、日常的な場面に適応させて考えることを意図している。資料を注意深く読み、選択肢を吟味すれば、比較的素直に、正解が導き出せる問題である。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見についての見解

第1問と第2問については『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」を参照

今回は新課程学習指導要領に沿った2年目の作問であり、教科書で学ぶ基礎的な知識を問いながら、同時に読解力、思考力、判断力を問うことによって、受験者が主体的に課題を発見し、広く深く考えることができるような問題となっているかどうか、とりわけ倫理問題の真価が問われたとあってよいが、外部評価は全体的に高く、好意的であった。具体的には、出題範囲のバランスが取れ、教科書等で学んできた知識を基に資料を読み取らせる設問など、作題問題に工夫がみられた等の評価である。こうした評価が高等学校側から得られたことは、作問の方向性の適切さを確認するものであろう。

4 まとめ

第1問と第2問については、『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」部分を参照。

外部からの好意的な高評価が示すように、全体としてまずまずの出来具合の作問であったが、他面少なからず要望もあった。それを踏まえて、今後は方向性のさらなる彫琢を図る必要がある。大問のテーマとの関連づけをより明確にし、(教科書記載を問わず)原典等の資料を積極的に取り上げて、倫理的な見方・考え方を組み合わせ、やりがいのある意欲的な設問、読解力や常識のみで解けるものや、逆に設問の内容の理解自体が困難なものも散見されるといった、難易度のばらつきを避け、受験者が高等学校の授業や教科書で身につけた知識をベースに、思考力・判断力を発揮することで解答可能な作問が求められることはいままでもない。心理学と現代の諸課題のみで大問2問、32点が配されているのは、現状に沿っていないといった、教科書での取り扱いが少ない分野の配点の比重に関する問題提起は、高等学校の学習現場や、教科書の学習内容を適切に学んだ受験者への配慮という点からも検討すべき、問題構成上の根本的な課題であろう。